

パルミープレミアム講座

ラノベイラストのお仕事講座資料「架空のラノベ設定」

講師のおちゅう先生には以下の資料を読んでキャラクターデザインをして頂きました。

架空作品タイトル・・・停学魔法使いの幻獣写生旅行記

■世界観

魔法がある程度日常的に存在しているヨーロッパ系のファンタジー世界。

ゆるやかな王政下に、各地の領主に自治権を認める封建制の社会。常備軍は首都に少数しか存在せず、基本的に騎士と傭兵で戦争は行われている。

産業は、農業が中心だが、都市部などには手工業者、交易業なども発展している。製鉄技術もあり、武器は一般的には鋼が使われている。

魔法はそこまで特殊なものではないが、学ぶために読み書きができる必要があるので、ある程度の教養のある階層のものしか勉強できない。

主人公は魔法学校の生徒だが、魔法学校はかなりのエリートのみが通える全寮制の国営教育機関で、卒業すれば官僚や士官の道が開ける。学内はエリート意識の強い良家の子女が多く、いじめが横行しているが、学校はあまり関与しない。自力で解決せよというスタンス。

■キャラクター

主人公 パルン 16歳・男

魔法学校に通う学生。

勉強は得意だが、天才というほどではなく、真面目な努力家。

体も華奢で、女の子と間違えられることもある。魔法の習得の座学においては、優秀な成績を修める一方、魔法戦闘のような実戦形式の授業においては万年最下位であり、同学年の仲間からはいじめられている。

彼が毎日真面目に宿題をやってきて、同級生たちがそれを書き写すというのは、日常の光景となっている。

そんな中、彼には一つだけ楽しみがあった。いじめやからかいを避けるため、誰もこない学校の地下書庫で、百科事典の記述を参考に、魔物の絵を描いたりすることだった。

ところがあるとき、暗い倉庫内を照らすために使っていた火の魔法の扱いに失敗し、読んでいた本を燃やしてしまう。

その本は、世界各地の文化や幻獣、魔法、土地神、植物、奇習などについて詳細な絵入りで書き記した旅行記だった。

あわてて消したものの、残ったのはもくじだけ。

燃えた本は、写本がすでに散逸してしまっており、中身には唯一無二とも言える貴重極まりない知見が収められているものだった。

学園の理事会はこのことを知って、彼を魔法使い業界から永久追放処分にすることを決定しようとしていたが、彼がいじめから逃れて、そこで学んでいる事を知った上で黙認していた学園長の温情により、彼を無期停学処分とし、焼け残ったもくじに従い、本を自らの手で作り直せば許すと伝えた。

拒否すれば永久追放、進めば過酷な旅。判断を迫られたが、パルンは旅に出ることを選択した。

【外見】

華奢で小柄な少年。女の子にも間違われるくらい。髪の毛短い。魔法使いというより、冒険者風の服装。大きいリュックサック。折りたたまれたイーゼルなど、カバンからはみ出た画材。

ヒロイン アルス 外見年齢26歳くらい・女

パルンが焦がした本の装丁の隙間に挟まっていた筆の精霊。パルンが旅に出る前に、せめて故郷の姿を記しておこうと、絵を描こうとして、この筆を使おうとしたところ具現化した。

筆は本の著者が、完成とともに装丁の中に仕込んだもの。毛の部分はベヒーモスのたてがみ製。特定方向へのコシの強さと、素早く動かした時のなめらかさを併せ持っている。

旅をしつつ、毎日パルンに絵の練習を強いるスパルタなお姉さん。話好きで、パルン旅の間ずっと話し続けている明るい性格。

自分は偉大な作家の絵筆であったということに高いプライドをもっており、「私を使うにふさわしい男になってもらわないと、筆がすたる！」と怒る。パルンの描く絵にあれこれと口出ししてくる。

精霊だがきちんと実体をもって存在しており、触ったり物を食べたりすることもできる。ただし筆を持っているパルンから、あまり遠くまで離れることができない。

長い間書庫で眠っていたため、焼失した本の内容や、それを描いた時の状況（自分を使っていた主人の行動など含めて）の記憶は思い出しづらくなっている。実際に描く対象の実物を見たり、近づいたり、現場に近いところに行ったりなど、トリガーとなる刺激がないとうまく思い出せないため、事前知識としてはあまり役に立たない。

パルンの旅を導く存在。芸術家であり、戦いは好まないが、悪人には一切容赦をしないところがある。あまりにも卑劣な相手だと、怒りのあまり勢い余ってうっかり殺しそうになるのをパルンに止められたりする。

止めてくれることに感謝している。

彼女の発する魔法の威力は、パルンの魔力に影響されており、パルンがガス欠状態のときは、著しく魔力が低下した状態になる。

本が燃えてしまったことで、本来の力や、詳細な旅の記憶は大幅に失われているが、パルンが少しずつ本を作っていく過程の中で記憶や力を取り戻していく。

【外見】

姿形は、やや古代風（若干中東テイスト）のちょっとセクシーな衣装を着たお姉さん。パルンよりも背が高く力もある。髪は長く、筆と同じ赤茶色。髪は筆の根元を意識したような感じでどこかで一箇所束ねてある。自信に満ちたお姉さん。

筆に染みている色に応じて、帯びている精霊の属性や、性質、髪の末端付近の色、服装が若干変わる。

何もついてない → 白系の服で水の術に優れる。

赤い絵の具 → 赤い服で炎の術に優れる。

青い絵の具 → 青い服で風や大気の術に優れる。

緑の絵の具 → 緑の服で植物の術に優れる。

黄の絵の具 → 黄の服で鉱物の術に優れる。

黒の絵の具 → 黒の服で魔力を打ち消す魔法に優れる。相手の魔力を黒く塗りつぶす。

上記は一例であり、混色や水分量、白を混ぜる等により、様々に変化する。

■ あらすじ

おおまかな話の流れ

いろんな街や村を旅しつつ、もくじに書かれた幻獣や魔獣の類を描いていく。中には、久しく姿を見せなくなっているものもある。

生態を学んで待ち伏せをして描くこともある。またあるいは街の人々の生活の変化（汚染や祭祀の中断など）によって姿を現さなくなっ、村に加護がなくなっ困っているのを助けることになったりもする。（結果的に絵も描けて、村も再生されて、幻獣も帰ってくる的な）

詳細なあらすじ

ユニコーンを描く

最初にパルン達が探しに行くことにした幻獣。理由は生息地が現在地から一番近いから。ユニコーンの水飲み場として知られる清流のほとりに行ったが出会えない。近くの集落で話を聞いても、ここ数十年見かけていないと言われる。

集落では近年生まれたという名物の淡水貝を使った料理に舌鼓を打つ。非常に美味で、貧血などの症状に効く滋養強壮作用もあるとして観光資源となっている。

近年、鉄砲水などの水害が増えたため、農業が衰退気味なこの集落にとっては、貴重な現金収入源となっている。

ユニコーン探しの張り込み調査を続ける中で、その清流のほとりに珍しく、金属質を食べ、金属質の巻貝を生成する、テッカクカワミル貝が多数生息していることに気づく。

本のもくじにも名前がある貝だったので、まずはこれを絵に描くことにする。アルスはこの貝はもっと離れたはるか東方の火山性の土地に多く生息していて、そこで描いていたはずだと語る。

実は集落の名物料理に使われていたのもこの貝で、ここ十数年でこの貝が多数繁殖するようになり、料理が生まれたことを知る。ユニコーンの消失と貝の関係を疑う。

集落で聞いてみると、この貝が増え出した時期とユニコーンを見かけなくなった時期は符号していた。

その後、川の上流を調査したところ、いくつかの鉱山と製鉄所を発見し、そこから湧き出る鉱水が清流に流されている事に気づく。

決して、汚染されているわけではないが、これによって清流はミネラル分の強い硬水になっており、味にもそれが現れていた。

集落周辺の男たちは多くが製鉄所と鉱山で働いており、この操業を止めて水質を戻すということはできそうになかった。

また、傷口の化膿をおさえ清浄を保つ魔法薬として需要のあるユニコーンの毛を拾い集めて居たという魔法薬師が集落に過去に居たようだが、彼は既に家を引き払って移住してしまっていた。ユニコーンには会えないかと肩を落とす二人。

製鉄所や鉱山の様子を探る中で、そこで作られた鉄資源を野党の類に横流しをし、その分をごまかすために過剰操業していた者たちの存在を知る。彼らは、自分たちを取り締まりに来たと誤解して襲ってくる。

応戦するが多勢に無勢。矢を受けて命からがら逃げまどい、山奥の小さな泉のほとりに建つ小屋の前で力つきる。

深夜、月の光に照らされて目を覚ますと、目の前の泉でユニコーンが水を飲んで居るのを見かけたが、すぐにまた意識を失う。

翌朝、古屋に住む年老いた魔法薬師に助けられ、ユニコーンの毛を使った傷薬をもらって元気になるパルン。

この泉は、清流とは違って、山の雪解け水が地下を通過して何百年かけて濾過されて湧き出している為、水質が違うという。

小屋に泊めてもらい、その夜再びユニコーンを見て、絵に収めることに成功するパルン。実物を見たのをきっかけに、アルスがユニコーンについて多くの知識を思い出す。

ユニコーンをはるか昔から、悪い人間によってそのツノを狙われてきた為、人間の武器に使われて居る鉄や銅の匂いが嫌いになった。だから、あの水は絶対ユニコーンには飲めないという。

また、アルスが以前の主人と共に、清流のほとりでユニコーンを描いた際に、冷害続きで苦しんで居た集落の人々を痛ましく思った主人が、透視の魔法を使って山に鉱脈があることを見つけ、鉱山開発を勧めた。

その際に、水に含まれる鉄をはじめとしたミネラル分が増えるだろうと考え、ユニコーンをこの泉まで誘導したという。また、今までの場所は人里に近く、実際ツノを狙って襲われることも多かった為、山の奥地にあったこの泉に誘導し、周囲に人間が迷いやすくする弱い結界も張ってやったという。

年老いた魔法薬師はそのことを知っており、おかげでここ最近ではユニコーンの生息数も増えつつあると言う。

ラストシーン

大雨が降り始める。過剰操業のツケで、山林の伐採が進み、上流の土地が脆くなっており、斜面から多くの小石が転がるなど、土砂崩れ、土石流の兆候が見え始める。

製鉄所と鉱山、集落の人々を避難させるために、危険を知らせに走る。

パルンたちは製鉄所へと急ぐが、その途中で野党と横流しをして分け前を得て居た連中に囲まれ再び危機に陥る。このままでは全員が危ないと力説するが、バレた以上、土石流と一緒に証拠も消えた方が良くと言われる。

激怒したアルスが、2・3人見せしめに半殺しにする。ユニコーンを描いた時の白い絵の具が筆先に残っていたのと、大雨の水分で、氷結魔法が大幅に強化されていた。

アルスは躊躇なくトドメを刺そうとするがパルンが制止する。

戦意喪失して恐怖に怯える野党たちを背に製鉄所へ急ぐが、時間がない。そこに、ユニコーンが現れて背を貸してくれる。全速力で製鉄所、鉱山をまわり、人々を安全な場所へと避難させ、次に集落へと向かい、同じく避難をさせた直後に、鉄砲水が集落を襲い、橋を破壊し、いくつかの家や田畑を飲み込んでいった。

最後は、村の人々が感謝の印として、再建した橋のたもとに、青銅製のユニコーン像を建立。「自分の嫌いな素材で自分の銅像が建ってるなんて、どう思うだろうね」的なオチ。